

## ② 新興団地の中の子育て——根ぎそう会とこれからのまじじくり——

松丸明子

### 一——遊びに対する考え方

子どもは遊ぶのが一番などといっている親が、いつの間にか勉強にこだわり始める。受験、学歴の社会の中で、子どもの人間性を考えるより先に、勉強、成績にこだわる親にとって、遊びは勉強の敵のように思い込んでしまふ。遊びの中にどれほど多くの学びがあるのかを忘れてしまったのは、今の子どもたちの遊びの内容を知っているからだろうか。それとも、遊びは勉強の敵とする大人の考えの中で、子どもの遊び方が委縮してしまったのか。

今の子どもたちの遊びには、まず道具がある。その代表がボールであろう。遊び場があって、そこで石ころみつけて石けり、棒切れをひらって野球というのではなく、始めからサッカーボールでサッカーをやるから集まろう、という約束になる。そこでは、遊びの上手さよりもサッカーの技の得意な子、学校でもスポーツが

できる子という序列がそのままの友だち関係でしかない。それはまた、受け身の遊びでもある。サッカーの競技としての上達はありえても、決まったルールの中で行動からは、生活体験としての進歩や新しい発見は生まれてこない。自然の中で自然を相手の遊びには常に新しい発見がある。それは、生命との触れあいであり、生きている物への慈しみも感じるようになる。そこには、主体的な立場で遊びに興じる子どもたちの姿が見える。そうなった時、学びと遊びの隔りは消えて、遊びの中の学びの大きさが浮かび上がってくる。その学びこそが人間性を培うことであり、親として子どもを養い育てるといふ根本ではないだろうか。

### ① 公園と遊び

しかし、今の社会の中で、遊べ遊べと叫んでも遊べる環境が存在するのだろうか。きれいに整備された地域や公園で、子どもたちは、主体

一——遊びに対する考え方

二——根ぎそう会への船出

三——子どもとの関わりの楽しさ

四——様々な取り組みを通して考えること

的にかかわる方法がすっかりわからぬままに育ってきている。この満たされ過ぎたが故に遠くになってしまった環境を、再び子どもたちに近づけてやるのが、今私たち大人の償いではないだろうか。

注 『Wonder No. 5』の特集「子どもと公園と遊び」の中で取り上げたことはまさにそのことだった。

「遠くから見ると、建物のジャングルのように感じられるこの若葉台も、一步中に入ると、緑が多く、心休まる思いにホッとさせられます。

また、その緑と一体となった公園が比較的多いのも、この団地の特徴のようです。これだけの公園があれば、目を輝かせ、喜々として遊ぶ子どもらでいっぱいになるのではないかと思っていたのですが、現実には寂しそうな公園、子どもらに仲間はすれにされたような公園の表情をみて、どうしたのかなという疑問が出てきたのです。

表一 若葉台内の公園の実態

公園利用面積	15ヘクタール 開発面積90ヘクタールの約6分の1 公園設置基準の2倍強
種類	特徴
④ 市西部公園緑地事務所の管理	消極的な 遊具配置
イ 地区公園……若葉台公園(3丁目)	
ロ 近隣公園……日向根公園(2丁目)	
檜山公園(2丁目)	
大貫谷公園(4丁目)	
ハ 児童公園……たんぼぼ(1丁目)	
えびね、山ゆり、菜の花(2丁目)	
すみれ、つくし(4丁目)	
⑤ 住民管理のプレイロット	20カ所 自由な設計 ユニークな遊具

子どもたちの好きな遊具のある公園がひいきされ、そうでないところが仲間はずれにされているのか。それとも、公園の方で子どもたちを仲間はずれにしているのか。そのあたりを確かめたくて、公園を見て歩くことにしました。」

こうして公園を巡り、子どもたちの遊ぶ姿を追い求めてみたが、やはり子どもたちが主役になれていない公園の様子が目についた(表1)。

子どもたちの遊びを求め、羽根木プレイパー

クを訪れたのもその時であった。

自然の中で、伸び伸びと遊ぶ子どもたちが、それができる環境に目を見張り、帰ってきた。

注 若葉台団地の住民によるミニコミ誌。昭和五十八年四月より発行、現在一七号、三〇〇部。

②—提言と実行のはざままで

ワンダーとしての提言は投げかけたものの、それを受け止め、現実には動きだすところもなく、気になりつつ一年が過ぎていった。

そして、『Wonder No. 10』で、今度は子ども

もの側の今の立場から見ようかと企画をたてた。「子どもたちのために——今、大人はどうしたらいいですか」というタイトルのもとに集まってもらったのは、親子劇場、自主保育、学童クラブ、布絵本など子どもに関わるグループのリーダー的な人達である。

今の大人の管理社会の中で、子どもたちは双葉の初々しさから、柔らかい若葉を一气に通り過ぎて老木の如く堅くなってしまう。そんな現状に目をつぶっては行かれないと、座談会では熱っぽい話し合いとなった。

「今、まわりをみまわしてみると、生活の中まで管理という意識が浸み込んできているような気がするんです。

学校も管理する側の論だし、地区センターで

もしかり。でも、これがさらに悲劇的なのは、管理社会と思われているような行政の中だけでなく、私たちの日常生活にもあることです。

『ダメデス』と言われた時に『ショウガナイ、当然カモネ』という諦めと肯定。そこには、なぜ? ドウシテ? という問いかける姿勢がない。

それは拒否した側へというより、私達一人一人が自問すべき事なんです。でもそれもメンドウなんです。クルシイんですよね。自分へ問題提起することは、考えなければいけないんですから。

そこである程度意識的に放ってしまっただけで、折り返しをしよう。それはすでに管理する側にまわってしまったことだと思うのです。そういう無責任さが現代の低迷した社会現象を生み出していると思うんですね。

例えば、花を折り取ることで、花がなくなってしまうらどうする、という管理上の問題で、折り取るのはダメということではなく、きれいだから一枝ほしい。だったら他の人もそう思って取ったっていい。それで花がなくなりそうなら、ほしくても可哀相だから取らずにおこう。そしたら他の人もそう思っていて、少ない花はやっぱりそこにあった。そのような自然の気持から発生した生き方、生活を大事にしていきたいと思うんですけれどもね。

現代管理病という病いは、一方で管理され、もう一方では管理してしまっているという自覚しない症状として、私たちを侵してきているのではないのでしょうか。

——木登り問題でもそうですね。ダメ、ダメって!!

うちの棟の目の前にちよいどいい木があるんです。登れる木ってそうないんですけれど、これは、登るのにすぐ都合のいい木なんです。

それで子どもに「登っていいよ」っていうと、喜々として登り始める。ただ自分の体重がのっかって折れる枝と折れない枝があるから、それがわからないようだったら、登る資格ないんだよっていつて登らせるのだけれども。

——ちよっと待って。それこそ最初から子どもにわかるものではなく、経験していつてはじめて身につけていくことじゃないかしら。囲りの反対する大人達へのうしろめたさに対する自分への弁解だと思っただけ。そういうわざをえない所がやはり現代管理病の一つではないかしら。

——ソーデス。スイマセン（一同笑）。まさにそうしてまで気を使いながらも、なおかつ木登りをやらせる（ソウ、ガンバツテ!!）。当然他の子もやりたいわけね。で、『おぼちゃん、いいと思うからいいよ』という。するといつの

間にかその子の親が私の後に来てた。私がいるにもかかわらず、『ダメヨ！ ノボツチャ』と黄色い声をあげる。子どもはと見ると、目を輝やかせて生き生きとしている。子どもそのものなよね。どうして気がつかないのかしら、我が子がこんなに嬉しそうな顔をしているのに、と不思議になるんですよ。

それに大事なことのもう一つは、こういう同じ体験を通して、子どもたちはすぐに仲良くなる。それは、お誕生会に行ったり招いたり友達関係とは一味も二味も違った関係になる。常に一緒に仲というのでもなく、その子の成長の糧……どんな時、どんな風に人と関わりあっていたらいいのか……という人間性を培い養っていくのがこういう体験だと思っただけ。

子どもの、この時代に大切だという事を与えていない親の姿勢に気づいてほしい。子どもたちがこんないい顔している。とつても大切なんだって分かってくれる親（大人）が少ない。

——結局、今の世の中、大人は、親は、我が子を、他の子との比較においてしかみていない。同年齢の子の中で、うちの子は勉強ができる、できない。運動ができる、できない。という優越感か劣等感しか持たなくなっている。

その子が、どういう人格を持ち、どう成長していくかを考え、その成長には、地域全体、社

会がどうあるべきかをみつけることが必要だと思っただけ。

——自分のまわりから、世界へも視野を広げられる人間に成長していつてほしいですね。そのためには、子どもの視点でみれる場。子ども本来の姿が出せる場がやはり絶対必要ですね。」（『Wonder No.10』より）。

## 二——根ざそう会への船出

座談会に集まったメンバーの中の三人で、子どものことを考えていく会「根ざそう会」の組織づくりを進めていつた。「子どもが子どもらしさを取りもどすために」というテーマのもとに。

同意、同感する人たちを巻き込んで、運営委員会づくり。子どもたちに関しての私達の思い。この会での学びや意図する所を何回もの場を設けて話し合い、納得を求めていく作業から入っていつた。

同感を得られるのは簡単だった。意志の通じるような人に声をかけるのは。それぞれのグループ活動を通して、お互いわかり合える仲間であったから。しかし、一緒にやっついこうよ、というところで、何度も何度も話し合った。我々もそれぞれのグループ活動等で忙しい。その

上で、この会を切盛りしていくことのしんどさは

覚悟の上である。この覚悟は、「今の子どもは現状をどうにかしなければ」という、ただただこの切羽詰まった気持が支えである。大丈夫？ やれるかしら？ そんな不安が我々にさえあるのだから声をかけられ、同感したからといって、すぐにやりますという答えが出ないのはむしろ当然の事だったと思う。

そうして、ようやく五人の運営委員は、一つの小さなボートに乗れたが、生涯教育学級「根ざそう会」という沖に泊っている本船までたどりつぐための苦労が始まった。

子どもたちのために、という思いは一致していても私たちの考え方は視野の狭い偏見ではないのだろうか。一般社会の中で、本当に子どもと真正面から向き合っている人たちはどう感じているのだろうか。真正面から向き合っている人って、誰だろう。

今でこそ、二年半の根ざそう会やその他の活動を通して、子どものことなら、あの方、この方、この問題ではこんな人と、いろんな方々、先生の名前が出てくるほどになったが、当時は皆目わからない。以前、新聞に載ってた人がいたな。大学の先生でこういう先生もいらっしやるらしいけど、どんなお考えをお持ちなのかな。手探りの状態とはあの時の事をいうんだろ

うか。

これから、学級生を募集するためのプログラム作りは本船を目の前にしながら大波に揺られていた。

新聞でみていた記憶をたよりに、徳村彰著の「子どもが主人公」をとり寄せて読んでみた。今まで悶々としていた胸の中が、洗い流されたようにすっきりし、そこに残ったきれいな石が「子どもが主人公」そのことばであった。

ひまわり文庫があったという日吉に電話をかけたがないという。本の出版元である径書房にたずねるともうすでに拠点は北海道へ移っているとのこと。お呼びするにはあまりに遠い。それでもとお便りを書く。子どもの村キャンプの説明会で上京するという返事もらった時の嬉しさ。

何の肩書きもない主婦が、子を思う母心のみで、偉い方、有名な方、忙しい方へ講演依頼をお願いする。知らぬが仏とはいえ、謝礼も気持だけしか出せないような立場からのお願いは大変なことである。言葉の一語一語に気を使い、こちらの思いだけで相手に納得してもらおうという骨の折れる作業である。それ故に、OKの返事をもたらした時の嬉しさはまた一つ感動として残っていく。

他の講師の方々やフィルムフォーラムとどう

にかプログラムも決まり、学級生募集、そして開講へと素人の母親たちの舵取りでどうにか本船は滑り出した(表1-2)。

### ① 学級生の熱気と取り組み

子どもが主人公の話の聴き、感動した学級生たちは、次に見た映画「子どもたちは甦る」の現地、羽根木プレーパークへの見学へと走っていった。

もうその後は、感動と熱気でグングン滑っていく。

プレーパークまつりを真似して、規模は小さくとも、ここ若葉台でと、夏休みの終りに暑さもものかは、開催され、小さい子を中心にして三〇〇人以上の参加があった。

次は秋の文化祭への取り組みである。北自治会の文化祭では遊ぼうパンで楽しみ、夜一人でも多くの人に我々の取り組みをアピールしようと、「子どもたちは甦る」を上映した。皮肉なこと小雨が降り出し、人々は、夜店に行列するだけで、隣りで上映している映画も目には入らぬ様子。しかし、やることを楽しんでくれた我々にとっては不思議な満足感があつた。

若葉台連合の文化祭では、遊びだけではなく教育のことも考えたいと企画検討した。林竹二先生の授業のフィルムを見た時の感動も残って

いた。

雑誌「ひと」を通して、平林浩先生の仮設実験授業が出来ることになった。年齢をこえた子どもたち、そして大人までもが、勉強する楽しさにぐいぐい引き込まれていった。隣りの会場では、教室いっぱいの子どもの広場、ダンボールの迷路トンネル、床いっぱいのお書きコーナー、手作りコーナー等の中で、子どもたちの楽しむ姿がみられた。

そして、とどまることを知らないほどにスピードに乗った船は、「ひと」の公開編集会議、自由の森学園の伊東信夫先生の授業、その後の討論会をもやってしまった。

この一年間の学びをもっと続けたい。そしてできたこの地域で根ざせるような活動へと発展させていきたい。学級生の中でも熱心な人たちが残って、二年目への準備は取り組みの段階へと進んでいった。

## ② 継続と活動実践の難しさ

一年目の余波が残り、あのことこのことと盛りだくさんの候補が上がる。そんな中で今年は特に、子どもを中心にした活動が出来るような企画を入れたい。そのために地域で活動する時の心構え、注意することなどが参考になるような内容に、ということを中心にすえた。

表一 60年度若葉台生涯教育学級「根ざそう会」プログラム

### <学習テーマ>

——子供が子供らしさをとりもどすために——

- ・遊びと環境
- ・子供と教育

月・日	会場時間	学習方法	学習課題と内容	講師・助言者
5月29日 (水)	地区センター 10:00~12:00	開講式	雰囲気作り	県青少年総合研究センター次長 池端正直
6月3日 (月)	けやき集会所 10:00~12:00	講演	若葉台の子供達の現状	元東中学校校長 高根怒臣
6月11日 (火)	けやき 10:00~12:00	話し合い	グループ作り	西田指導主事 早川指導員
6月24日 (月)	けやき 10:00~12:00	講演	・子供が主人公 ・子供の村へ	ひまわり文庫主宰 徳村 彰
6月30日 (日)	地区センター 10:00~12:00	フィルム フォーラム	「子供はよみがえる」 羽根木プレイパーク	運営委員
7月15日 (月)	けやき 9:15~11:30	講演	今教育に問われているもの	横浜市大教授 伊藤隆二
9月12日 (木)	地区センター 10:00~12:00	フィルム フォーラム	「林 竹二先生の 授業・人間」について	運営委員 学級生
9月20日 (金)	地区センター 10:00~12:00	話し合い	グループディスカッション	西田指導主事 早川指導員
11月20日 (水)	地区センター 10:00~12:00	開講式	グループごとの学習報告会	同上

### <その他の活動>

- ・夏休み子どもまつり
- ・北自治会文化祭 あそぼうパン 「子どもたちは甦る」上映会
- ・若葉台連合文化祭 仮設実験授業 <空気と水> 和光学園 平林 浩先生  
子どもの広場
- ・雑誌「ひと」公開編集会議 自由の森学園 伊東信夫先生(国語)の授業と編集会議(討論会)

話を聴けば聴くほど、「これならやれそう、やりたいね」という気持が高まってくる。しかし残念なことに、プログラムの内容が多すぎ、それをこなしていくことだけに流されてしまった(表一3)。

取り組んだ内容は一年目と二年目をくらべる

とそんなに違わない。いやむしろ一年目の方が数多くこなせたと思われるのに二年目の停滞は何だったのだろうか。

大きな原因として、一年目は、学級生の中から生じてきたエネルギーで、その時、その時、一つ一つを大事に、そして意欲的に取り組めた

表一3 61年度若葉台生涯教育学級「根ぞそう会」プログラム

	日時	会場	内容	講師
1	5月30日	2丁目19棟	開講式 ・オリエンテーション	社会教育主事 西田主事 川崎市立こども文化センター 針山直幸
	10:00~12:30	けやき集会所	講演 ・子供集団を育てる地域の役割	
2	6月5日	若葉台	(公開講座)	日本遊び場協会会長 大村璋子
	10:00~12:00	地区センター	講演 ・子供と遊び場	
3	6月22日	若葉台	(公開講座)	自由の森学園中学高校学校長 遠藤豊
	1:00~3:00	地区センター	講演 ・学ぶということ	
4	6月26日	2丁目19棟	フィルム ・羊たちの委節	運営委員
	10:00~12:00	けやき集会所	フォーラム ・ディスカッション	
5	7月13日	若葉台	パネル ・子供達の声	羽根木プレーリーダー 笠原泰正 おやこ劇場青年リーダー 吉田きよ子
	1:00~3:00	地区センター	ディスカッション ー実践活動からー	
6	9月9日	若葉台	(公開講座)	日本レクリエーション協会理事 兼松ムツミ
	10:00~12:00	地区センター	講演 ・子供の理解と文化活動	
7	9月18日	2丁目19棟	(公開講座)	ラジオ日本編成部員 池谷まゆみ
	10:00~12:00	けやき集会所	講演 ・アジアとのコミュニケーション	
8	9月25日	若葉台	(公開講座)	国士館大学講師 篠田登美江
	10:00~12:00	地区センター	講演 ・学習と社会参加	
9	10月2日	若葉台	実地研修	受講生
10	10月24日	若葉台	実地研修	受講生
	10:00~12:00	地区センター		
11	11月21日	4丁目	閉講式	社教主事 西田主事 川村久子
	10:00~12:30	とちの木集会所	まとめ	

<その他の活動>

若葉台文化祭「子どもどろんこ祭り」、フィルム上映

のだ、二年目は一年目の疲れと最初から組まれたプログラムがあまりにきつちりしすぎていたために、それをこなすことが最優先となってしまうってこと、その間に自分たちで試行錯誤しながら主体的に取り組める余裕がなかったこと、リーダーにそれらの考えを受け入れる精神的余裕がなかったこと、等があげられる。

そして、学びだけのむなしさと実践へと移れないもどかしさが残っていった。

③リーダーの存在

そして三年目。二年目に新しくはいった学級生の中からも是非続けて下さいとの声が上がります。一年目、二年目と続けてきた学級生のほとんども続けましようという意見である。

しかし、誰がリーダーになるかというところでは話は一転してしまった。一年目、二年目は順送りリーダーをやって来た。次のリーダーに思っていた人がやれない事情になった。リーダーをやった我々もまだやってない他の人々もリーダーとしてやっていくだけの時間がなくなっていたのである。一年目、二年目は言い出しっぱなしの責任と覚悟で外でのリーダー的役目を負いながらもどうにか務めて来た。もちろんまわりの学級生に支えられたのである。だから今回も、と思ったが、誰もいない。根ぞそう

会は是非続けてほしい。でも、今年は、幼稚園母の会の会長だ。自主保育の中心的世話役にならなければいけない等々。確かに無理強いしてできることもない。皆んな忙しい。どうして忙しい人がさらに拍車をかけて忙しくなるのか。そんな嘆きの中で、結局、今年は中止という残念な方向に変わっていった。

しかし、やっぱり続けたいという声が再び上がり、二度目のリーダー役を私が引き受けて、今、三年目を迎えている。

今までは遊び中心に考えてきたけれど、いつもそのとなりであって気になっていた教育の問題。学校や、授業、先生という立ち入り難い壁の前で、立ちすくんでいた。その壁をのり越える努力から始めようと、先生との交流会を持つたりと企画を進めてきている。昨年度の反省もあり、今年度は学級生との学びの中でプログラミングして、今年度は学級生との学びの中でプログラミングして、運営遂行上のしんどさをかかえたスタートだった(表14)。また、初めての学級生と、すでに学習を積んで来た学級生のギャップを少なくすることも課題であった。

### 三——子どもとの関わりの楽しさ

二年目、実践活動へと移っていかないもどかしさの中で、私は、学校のクラス委員という役

割を通して、子どもとの関わり方を考えてみた。

クラスの親と子の親睦会として、ミニ運動会、ドッチボール大会等の催しが一般的なか中であって、

「親の子どもの頃のことを子どもたちに話してやりませんか」という投げかけに、クラスのお母さん方はびっくりされたに違いない。四〇人以上の子どもの前にして話すことなど

自身不安であった。しかし、やれる方法はあった。無理なくやろうと考えた時、話すという方法ではなく、一緒に遊ぼうという方法をとった。子どもの頃の遊

表—4 62年度若葉台家庭教育学級「根ざそう会」プログラム

<学習テーマ> ——子どもが子どもらしさをとりもどすために——  
「学ぶこと・育つこと」

3年目を迎え、今年度は学級生の話し合いを大切にしながら、テーマをしっかりと自分達のものに消化していきたいと思います。

皆さんといっしょに考え、学ぶ中から、ききたい講師の先生も、選んでいくなど、自分達でプログラミングしながら進めていきましょう。

月日 時間	学習形態	内容・講師など
5月26日(火) 10:00~12:00	開講式	「子育てはむづかしい？」浜村和子先生(全国問題研究会)
6月9日(火) 10:00~12:00	話し合い	グループづくりととり組み方
6月20日(土) 3:00~5:00	シンポジウム	「家庭と学校の相互理解を深めるために」 —地域の先生方をまじえて—山田暁生先生(町田市立成瀬台中学教師)
7月14日(火) 10:00~12:00	話し合い	グループ活動について
9月8日(火) 10:00~12:00	講演(予定)	これまでの学習の中からおききたい先生を選び、お呼びして…… 木幡先生 —算数の授業と討論会—(地域の先生もまじえて)
9月末~10月 10:00~12:00	話し合い	この間、3回程の話し合いを予定 グループ活動と発表会
11月中頃	講演 パネルディスカッション	今までの活動のまとめとして 教育について先生、母親、行政、組合等の代表者パネラーに
11月24日(火) 10:00~12:00	閉講式	

びを頭の奥から引っぱり出し、花鬼、あやとり、笹舟流し、貝の笛、ビュンビュンゴマ、石けり等々、一年間で七回ではあったけれども、二年生の子も達はその日を楽しみに待っていてくれた。子どもたちのすばらしい友だち関係、先生とクラスの雰囲気よさを遊びを通して感じる嬉しさがあった。このことは、他のクラスへも影響を及ぼし、学年での取り組みへと発展していった。

子どもと一緒に楽しむってなんと素晴らしいことだろう。子どもたちの生き生きと輝いている瞳を見ることを我々は忘れていたのではないだろうか。まさに、子どもの世界に学ばねばならない大人たちである。

しかし、この楽しさは子どもたちの存在がここにあったから容易に持てた、ということでもあった。

今年、根ざそう会の外に、PTA、子ども会と関わりを持ってしまったけれど、いずれも、まずそこに子どもがいるという現実がある。根ざそう会で悶々としている部分を少しでも実践していこう。そう考えて、子ども会の方は、まず、子どもたちがたむろできる場づくりを中心に考えた。しかし、理想と現実の差は大きい。たむろできる場へのしかけに、まだ一工夫も二工夫もいる。さらに、自治会等の参加行事の多

さ、五〇〇人からの子どもたちへの浸透性等、問題は山積み状態である。大人の役員の考え方も今年は積極的な人が揃っているとはいえず、全体的な子どもの動きを見つめていく余裕はない。ただ、班長を中心とした一部の子どもたちは、今、子ども会をおもしろいと感じ始めているように、後半、どこまで子ども中心の活動に盛り上げていけるか、それは、子どもたちから大人への信頼度のペースメーカーともなるものだと心している。

そして最近持ち込まれてきた話が、地区センターでの少年活動促進事業“ワンパクサタデイ”である。市が今年度、地区センター六館に、五〇万円の予算措置を講じて、活動させようというのである。事業計画にあたって、若葉台地区子ども会地子連長という立場で、地区センター運営委員の末席にいた私に考えてくれなにかとの相談であった。

今まで根ざそう会で冒険遊び場的な所がほしい、つくりたいねといったことが、行政主導という形でも一歩実現に近づけるのではないか。それには、未熟な我々にかわって、仕掛け人となってくれる人を探そう。レク指導員の先生、また、プレイヤーを。ヨーロッパでは職業として成り立っているらしいが、今、日本あるいは横浜では、時間をつくって来てもらえる

人を探す苦労から始まる。

この人探しは、未熟な私達に代わって、ということもあるが、年度途中に持ち込まれたこの話に、今の我々の忙しさでは、企画、運営をスムーズに遂行していくのに十分な余裕を持ちあわせていないという現実がある。しかし、チャンスであるのも事実。地区センターの計い無駄にしないよう事を進めていこうとしている。

#### 四——様々な取り組みを通して考えること

このような様々な取り組み、活動に足を踏み入れ、手を突っ込みしているのは私だけではなく、真剣に考えている仲間たちみんなの現状だ。それは、母親という種族のせいだろうか最近ふと考えてしまう。子どものことに関して、一方からだけ見ていくということでは済まされない。遊びのことを考えれば教育のことも考えざるを得ない。そのことはまた、根ざそう会で考えているだけというのではなく、PTAも子ども会も自治会も自主活動も、あらゆるものが絡みあってきてしまう。

一方では、大多数の母親たちは、パートに出て子どもたちを塾やクラブへと向わせる。考えても変わらない社会に抵抗していくとするとやはり物好きな人だけが残ってしまうのだろうか



か。一日に二つ、三つの会合や活動は普通のことで、四つ、五つと夜にまで及ぶことも少なくない。そしてその分、電話連絡、事務処理も膨らんでくる。

こんな状態の一つの解決方法として、ネットワーキングのあり方の研究も期待したい。地域活動にあって、ネットワーキングの重要性は大きい。しかし、あれもこれもと係わってきた時、自分の中心的活動と他との連携をどのようにやっていくか。それぞれの活動グループを、大局的に見られる所で把握できるところが必要であろう。できれば、そこにこそ自治会等の役割を期待したいのだが……。

子どもの生活を通して考えてきたことではあるが、これから先、労働時間短縮となっていく社会の中で、今、一部の主婦によって担われているこの忙しさを、働いている人、父親たちも一緒になって、考えていかなければいけないことであろう。それは、外ならぬ、人間性そのものの営みをみつめていくことだからである。

このような人間性の営みを中心にした活動を考えていく時、今の男性中心の自治会活動をもっと村おこしの発想へと転換していくことが必要になるのではないかと考える。

今、私達の活動は、どれ一つとしてこんな事をやっています、と言えるものはない。しかし、

これらの根ざそう会のあり方も含め、それぞれが、子ども会や学校で、またワンパクサタデイ等の中で、子どもの姿を見つめ直すことをより多くの人々へ訴えかけると共に、それぞれの活動をさらに進めていこうという気持ちだけは確かだ、エネルギーに持ち続けていこうとしている。

もっと多くの人を巻き込みながら、子ども達の姿に、そして子どもたちが築いていく我々の次の時代への展望を託して、頑張っていかなければならないのである。

△若葉台団地在住▽